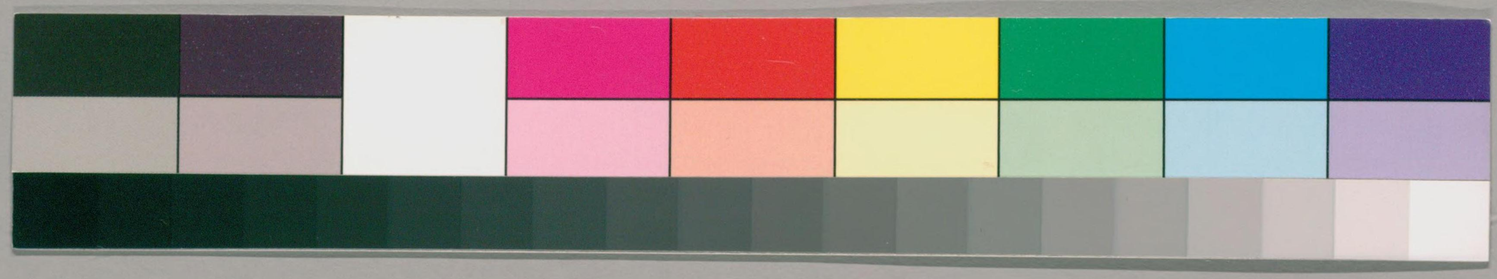


ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35

NM-35

續共古日録

奉祝御式銀婚

慶賀之祝ス十五の式名

蜜月ヲ祝ス

今ノ四年五月十日聖上銀婚御式奉祝ス

この次の頁を開けば祝にうつりて笑

始メ之ヲ祝スル十五種の式アリ之ヲ祝スルモノ近キ者又ハ遠キ者ニ與フルモノニシテ其ノ名称ト之ヲ贈ル事ヲ發起シ新旧ノ物品ヲ贈ルコトヲセリ其名称ハ

綿婚式　一年ノ祝ヒ

草ノ葉　二年ノ祝ヒ

紙婚式　三年ノ祝ヒ

革婚式　四年ノ祝ヒ

木婚式　五年ノ祝ヒ

花婚式　六年ノ祝ヒ

鉄婚式　七年ノ祝ヒ

銅婚式　八年ノ祝ヒ

陶器婚式　九年ノ祝ヒ

水晶婚式　十年ノ祝ヒ

錫婚式　十一年ノ祝ヒ

絹婚式　十二年ノ祝ヒ

麻婚式　十三年ノ祝ヒ

象牙婚式　十四年ノ祝ヒ

珊瑚婚式　十五年ノ祝ヒ

紅玉婚式　四十年ノ祝ヒ

金剛石婚式　五十年ノ祝ヒ

此ノ名ヲ以テ祝スル法アリ其起源ハ西洋ノ元日チユトン語 Jubilee ヨウビレー ト云フ

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35

ガラス使用

より出て古代のチユートン人が野蛮なる祭りなる飲物もりし」歌ふ歌は月の二運行期雨そんに水をかけ風あらしようなる蜂蜜なる飲物もりし」なりア言葉いい今日となりて解し難きものもりし」なりせの権妻ゲル」いらぬ世話も焼くものかな同意なりん「おちゃっぴいのおそんは罵ることばなるど茶焼よりも腹が悪事をこと「おつなもつこしてあめえ何とする」落世床「我女の詞ついに訛言」みつつは風もう異な言態なるどの意なるかおもおかしくしらく清輔集「ごめけにおかしらけたる椎葉のもかばそ

おちゃっぴいなつ等の詞

おかしらくなどやれ等の言葉

あるき春もありなり」みちしらけ「おかしらけ」とふ洒落ひ飾ることはの洒落ひ飾ることはやるこことをふるんやれ東言に通文をふるんこれもしやれようなる

安来節

色のまつ黒けのたどんでさへ雪の膚なぶき女ものもつ誰れかそんの目にとまるん私の住な座敷へこの雪さと画に遠さかなたをながむれば赤青黄とりまぜて色美しく流めなされ高くかかれる虹の橋てわが姉のはれ着の帯にと一虹をいのこととれしい雨のあとの雪の重車やなうるる童話

虹をよみこんだ唄

重車やなうるる童話

大正七年

猫逗薬園ヘうすのみハうかゞこゝうらず

とおスト柱の穴をさぐり出そうとする体の見てなんともあめくう
さんはおスト〳〵と捨んでくるよ」とうそ
猫逗薬園へ西ろんず又聖書
有父こゝへうすドリンヤコマの古典ニも見へぬ古くっそら
のもっとうしろ〳〵とさぐりしそこを見めエジプト人猫を神聖視して
ミイラつもセ〳〵とエジプトよりコマニテ猫
松〳〵とうそ
うそ〳〵の猫ゆゑ悪人ゆゑ鳥りて来ニ三
り免のそそて雑何台に有名殺野千
仲台諸記也
猫ニ文十七年
猫（外甲の依集）に利名義ニ純名
わうそ玉は名は大又ニ諸
猫なる供の恐ろうそんとうおう

松岸にてき石に刻せる仏像

冥福増長愛應祈願の為
十数基なり（行く過ぎの
手前右のそら
右必ず成の側ニ

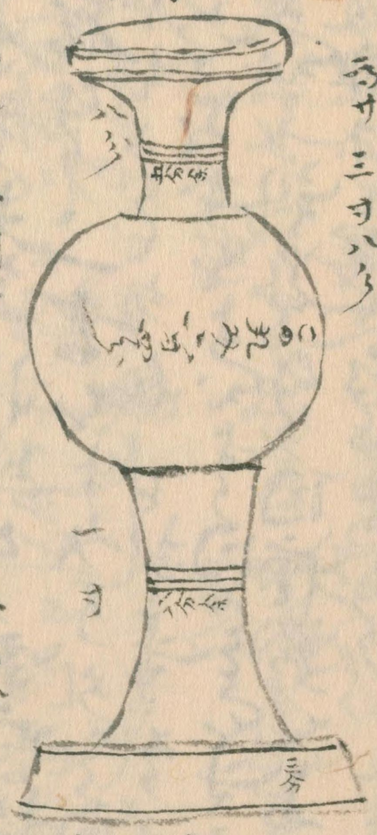
国立国会図書館　タイトル『続共古日録』 請求記号 860-35
ガラス使用

経筒と共に埋めし

松浦の松方かとも思ふ
国のかき塵添ニ平面ニ
りしものそのまゝと梵字及年月
仏体の形ちも甚ふかく浮ニ彫
いてもふくゞ後世のものゝ
ゐ行く時平地者ニ用ル鋤ニて
掘しもの
陶製人形の如きもの多く焼かた
玄室好玄室より経筒と共に
ゐる室ニ埋納ニあり高者
ゐるもの

出土の銅瓶

古銅瓶甲府
城内ニ埋ル
たるものとて甲
府ニ有ル時の
図



高サ三寸八分

口ハ

一形の神仙遠利ハ今ハあれは始ちゝ
て三寸程の波ふもの埋納
掘出しあり
今ハ
ゐる

経筒ハ平安
のもの
ゐる

京草の名義

京草のことハ

高鳥馬

高鳥馬は布利の町の奥、谷合の家なり。屋和尚と云ひし中興の祖、桃栗柿柘榴など野山に多く植ゑ置きて、墨が世又は墨とも云ひ、又は草庵とも云ひ、又は草菴とも云ひ、又は茅屋とも云ひ、又は茅舎とも云ひ、又は八景とも云ひ、又は十本松とも云ひ、又は高鳥とも云ひ、又は高鳥園とも云ひ、又は高鳥園とも云ひ、又は高鳥園

十二、さゞげの莢やへらまの莢やれいしの莢の通
莢のやうなは長く刀のそりてとうもろこしの
ごとくなるもの長くそりてまがりたるもの
莢のうへに茎と葉が長く出るもの丈ひくくて
枝ばかりにて莢なきもの丈の大小三通の
ありてもろこしからの枝莢を摘まれば
莢も忽ち枯て白鷺をならべたるやうになる
もの鉄砲隊同前

棒落花生の莢の実の莢に莢まれるのはそれの事あり

「棒」芋や

おきながらけ飾り生の棒芋を莢の
ついてゐるのまゝ小口より
ふかして莢に来るのものそれ

「芝」蒸薄や

「棒」芋やうそうそきや 棒芋
莢ごとふかし莢ばかり
ゆでて莢より
「朝」顔や

少し
莢の通
莢ごと
莢ごと
莢ごと

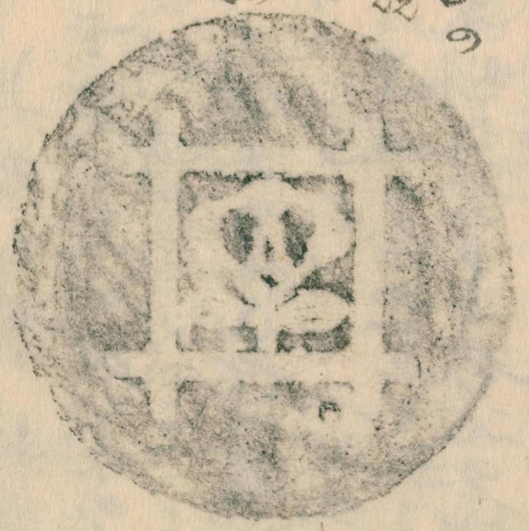
向ヶ岡貝塚公園約図

大正十四年四月三日 有志当貝塚保存会の同人 向ヶ岡貝塚の現状を視察 の為 来集 せり 今日二人同車せり 谷文晁 の図にもとづき 模写 せしもの 向ヶ岡の図 を以て 比較 するに 殆ど 一致 せり 但し 文晁 の図は 縮写 せしもの なれば 細部 に 於ては 多少 の 差異 あるを 免れず 惟ふ 文晁 の図 と 現状 との 差異 は 主として 貝塚 の 変化 に 基因 するもの なるべし 即ち 文晁 の図 に 現はれ たる 貝塚 の 部分 は 今日 既に 全く 消滅 し 僅かに 其の 一部 を 存 するに 過ぎず 而して 文晁 の図 に 現はれ ざる 貝塚 の 部分 は 今日 尚 其の 大部分 を 存 せり 而して

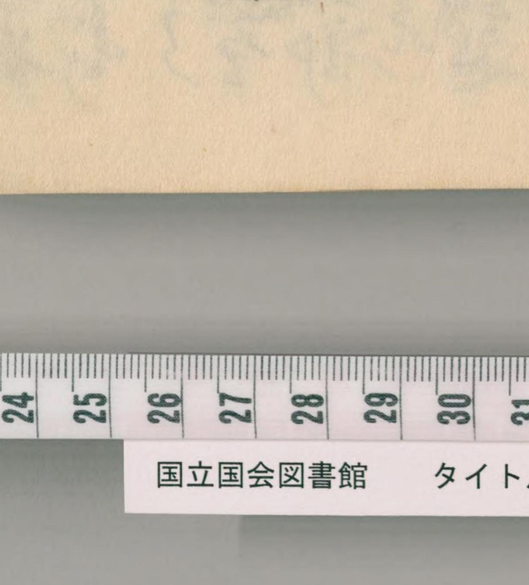
国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35　　ガラス使用

三井寺の法の起り

秋の石間の芋坂



岡山の名物



秋の景

歌合の中に詠ずる

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35　　ガラス使用

西遊記帰国日を題せし書あり其著者を詳ならず
人述とありて何人なるをも知らず書なり序に
真言と注明せし記書なり序に
茅茅とも茅ともいふこと赤山大
大棒昆布堂を德の名称として
の如き此形の称あるとぞ矣
注言ここや沼の名称なり日次
蜀日とその本とを記し其著者のをも悦びあり
其角の号は鉄を添みは
五元集 壽鉄 来て雛の宝文廻
五元拾遺 なかざりの男が家から人は誰

後の日は古墳ありしかもあり四辺墓もせまりめぐりめぐりて
此四辺の歌とも
児玉町より三哩余南寄文衛乃北側
の古墳あり
多摩郡息の村
玉乃児玉郡金屋村住人中
延徳四年壬午五月廿日

杉山神社神鏡壱面
杉山大明神 今も拝
(今ハ大里郡久下村
神宮寺にあり)

嘉禄三年 古鏡
児玉郡内遍照光寺にあり
此鏡の心曼荼羅にくまつらに同じ
とある本より乱菊草とは名のみなり又馬鞭草と
(なほ大和堂)
とも
同じ
とありとも

縁日とは、その仏の
の義にて衆生其仏に縁
三十仏を三十日に配しこれを拝せ
給ふ日なりとの説あり

三月 多宝仏 四日 阿弥陀仏
二日 燃燈仏 五日 薬師仏
三日 定光仏 六日 釈迦仏
四日 勤王菩薩 七日 普賢菩薩
五日 大通智勝仏 八日 文殊菩薩
六日 月明仏 九日 弥勒菩薩
七日 無量寿仏 十日 観世音菩薩
八日 薬王菩薩 十一日 龍樹菩薩
九日 月光菩薩 十二日 施無畏菩薩
十日 阿弥陀仏 十三日 虚空蔵菩薩
十一日 燃燈仏 十四日 勢至菩薩
十二日 弥勒菩薩 十五日 阿弥陀仏
十三日 薬師仏 十六日 観世音菩薩
十四日 難聞菩薩 十七日 龍樹菩薩
十五日 阿弥陀仏 十八日 月光菩薩
十六日 観世音菩薩 十九日 無畏菩薩
十七日 龍樹菩薩 二十日 地蔵菩薩
十八日 月光菩薩 二十一日 文殊菩薩
十九日 施無畏菩薩 二十二日 弥勒菩薩
二十日 地蔵菩薩 二十三日 薬師仏
二十一日 文殊菩薩 二十四日 観世音菩薩
二十二日 弥勒菩薩 二十五日 勢至菩薩
二十三日 薬師仏 二十六日 阿弥陀仏
二十四日 観世音菩薩 二十七日 虚空蔵菩薩
二十五日 勢至菩薩 二十八日 普賢菩薩
二十六日 阿弥陀仏 二十九日 釈迦仏
二十七日 虚空蔵菩薩 三十日 薬師仏
二十八日 普賢菩薩
二十九日 釈迦仏
三十日 薬師仏

安永七年のころより火災東堀尾屋権兵衛
の娘お清と申歳廿九才にて十三才にて
ふと病つきいろいろ療治加持祈禱
色々せしかども次第に重り
北の枕に北向に寝かせよと
に依てなるほど
又政次の法事の時
こは山ちやうへ二ノ生
にが艶しやうと
艶しやうと
艶しやうと

始通夜、聞いた佛神經のことを佛井路迎日示現日或は其神延長降現昇山等の日道書第四冬
屋義もとに日の經是名に入ること
採塵雑談に朝顔言夕生
毎月六ツは朝をもて吉時とし
丑八ツは夕をもて吉時とし朝
とは彼の二等級りをしむもの
用捨箱にこく菩の教言に
事あり是は吉凶の事なり
は七日まで此の義の經りは其の
弟華まで（貴重年号を通に
ご人同為を通れ野はつれをの

始通夜、聞いた佛神經のことを佛井路迎日示現日或は其神延長降現昇山等の日道書第四冬
屋義もとに日の經是名に入ること
採塵雑談に朝顔言夕生
毎月六ツは朝をもて吉時とし
丑八ツは夕をもて吉時とし朝
とは彼の二等級りをしむもの
用捨箱にこく菩の教言に
事あり是は吉凶の事なり
は七日まで此の義の經りは其の
弟華まで（貴重年号を通に
ご人同為を通れ野はつれをの

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用

東京の縁日。縁日とは神仏に縁故ある日にて祭日と其意義同一なれど自から別ものとなれり。昔時より官廳より祭典の為に定めたる日を縁日と唱へ、なれど奉幣使の如きは其時より出ることなれば、これが為に生じたる縁日とはいひ難し。

現今東京に於ける縁日を列記すれば、

一日の市　神田明神祭礼
二日　九、三日　十七、四日　十三、五日　七、
九日　十、　十日　七、十一日　九、十二日　十二、十三日　十、
十七日十九、十八日十八、十九日十一、廿日　八、廿一日十二、
廿五日十、　廿六日七、廿七日八、廿八日　土、廿九日　八、
廿九日　九、　三十日　〇、總計　三三六

外日の中二支を以て縁日とする事
子の日 大黒九 卯の日 弁天 酉の日 毘沙門 初卯 午の日 稲荷 酉の日
丑の日 恵比寿
寅の日 黒ボウ九 巳の日 弁天 十三
こんらと日明りとそとの名せる時は総数の百祥をあつまり其中に
前を数は廿四日にして廿の縁日あり名し此日ばかり参詣多かるか
にあらず三千余の縁日となりて縁日の高人のまに仕に忙
敷日となるなり。最少の縁日は廿九日にして二つあり。皆無きも
は三十日なり
ひとり代まで元十月百二の縁日をもれ
なしなり戸ぬ代のまで字
絶なるのと云ふ。ちなみに元廿二あり廿九日にハ外ふをかの日を
やうなしもの元十二、再び而て名多ハ十八ありて二日廿九
日晦日は皆無なり。

(寛政三十年一月七日の記也)

一新命地を繁栄なる原因

二七不動　三八大黒　四九地蔵　五十稲荷　二日毘沙門　三地蔵
其等の多数は山ノ手新命地にあり

一偶然迷信の結果

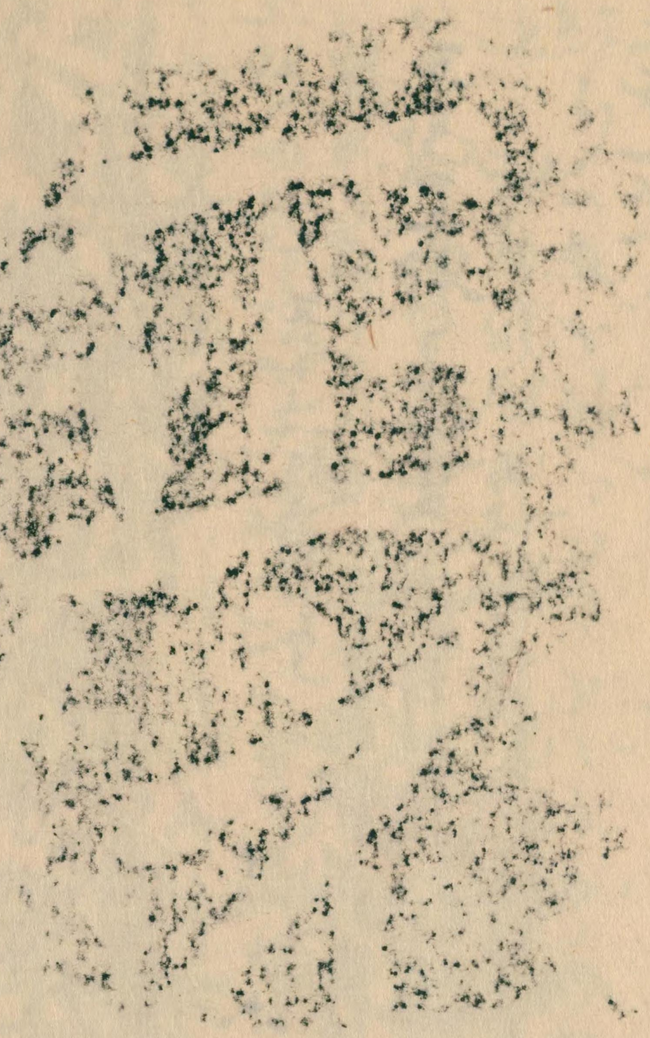
○元宇和島の鈴木新田と称する墓地に天保年間鈴木村人の難病を祈せりに住しとも本村人の難病を祈せり半蔵坊明治十年の比迄参詣多かりて半蔵坊の墓前にて自然と山林に手を合せしが為の天狗は墓山に居ると称せしより墓石を動かすと祟ありと称し職百姓を動かすと

綏日あるもの起り
佛典に出たるもの
勝王經第七辨才天品に黒月
とのことあり已の日を為すは偽經
同話に黒月八日白月八日とあるも
佛菩薩の勅によるあり
薬師の八大勅及十二大大勅
神に綏故ある動物によりて
寅年申
山城大養寺佛は長和三年甲寅五月廿
安置の由日本紀略に載す
月廿二日三刀屋尊者の告
十七日なの記事の
又德川家康元和二年十二
寅年生れ
なの生死寅年申の化身と

稲荷の午の日
大黒天の甲子
富士及庚申の申
矢喜日
東照宮の
十七日
寛永の地に
寛慕の
十七日
猫
慶諡
初卯の物忌
日蓮宗の
丙の午
ベツタラ市の表示
綏
の
吉綏かなるは
有馬卿の水天宮
金比羅大権現
下谷の摩利支天
神奈川
本郷の
平河天神

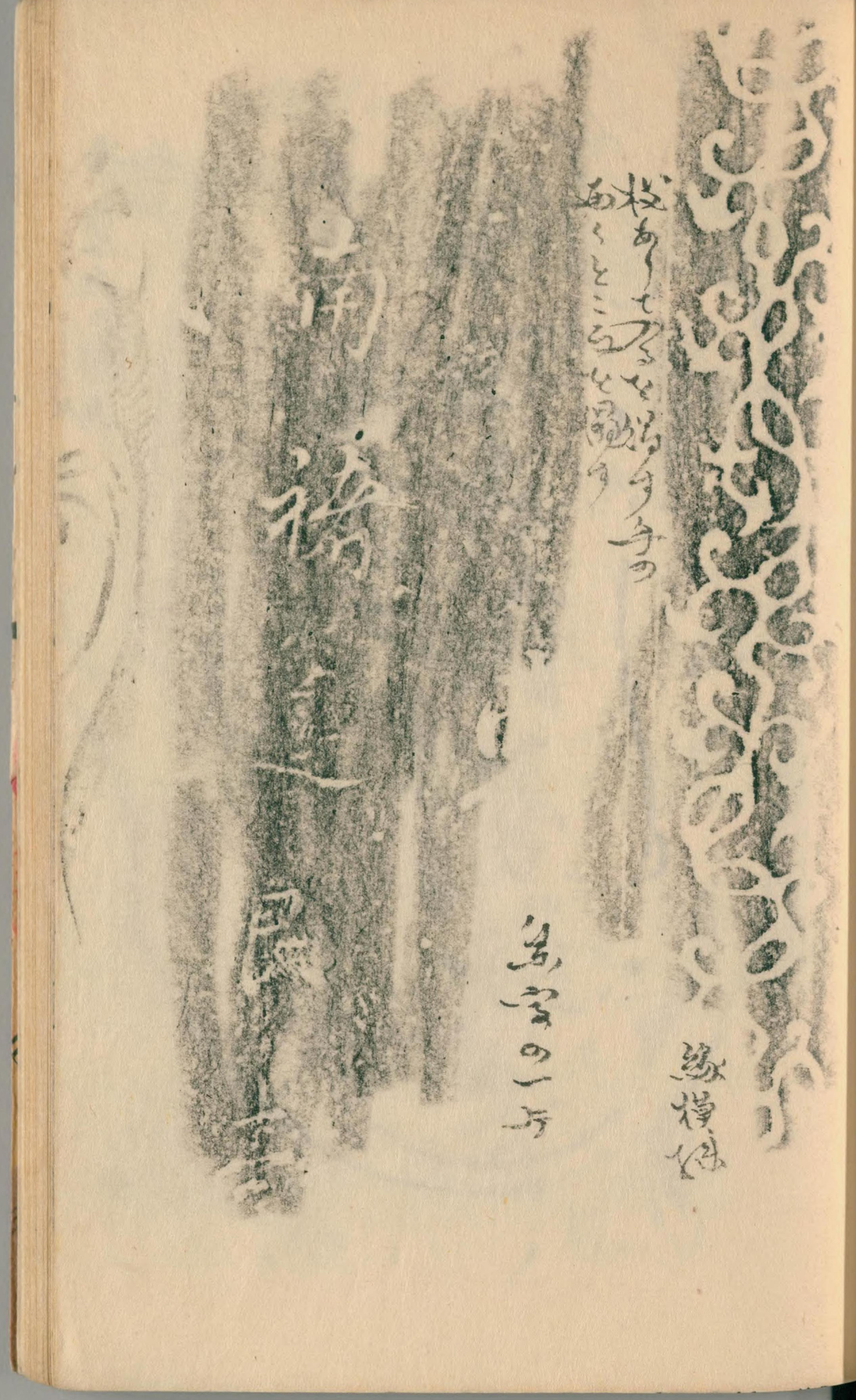
文字は一行に刻してあり
年号の上部に孔一個あり

二行ミ詰ル種子ナリ

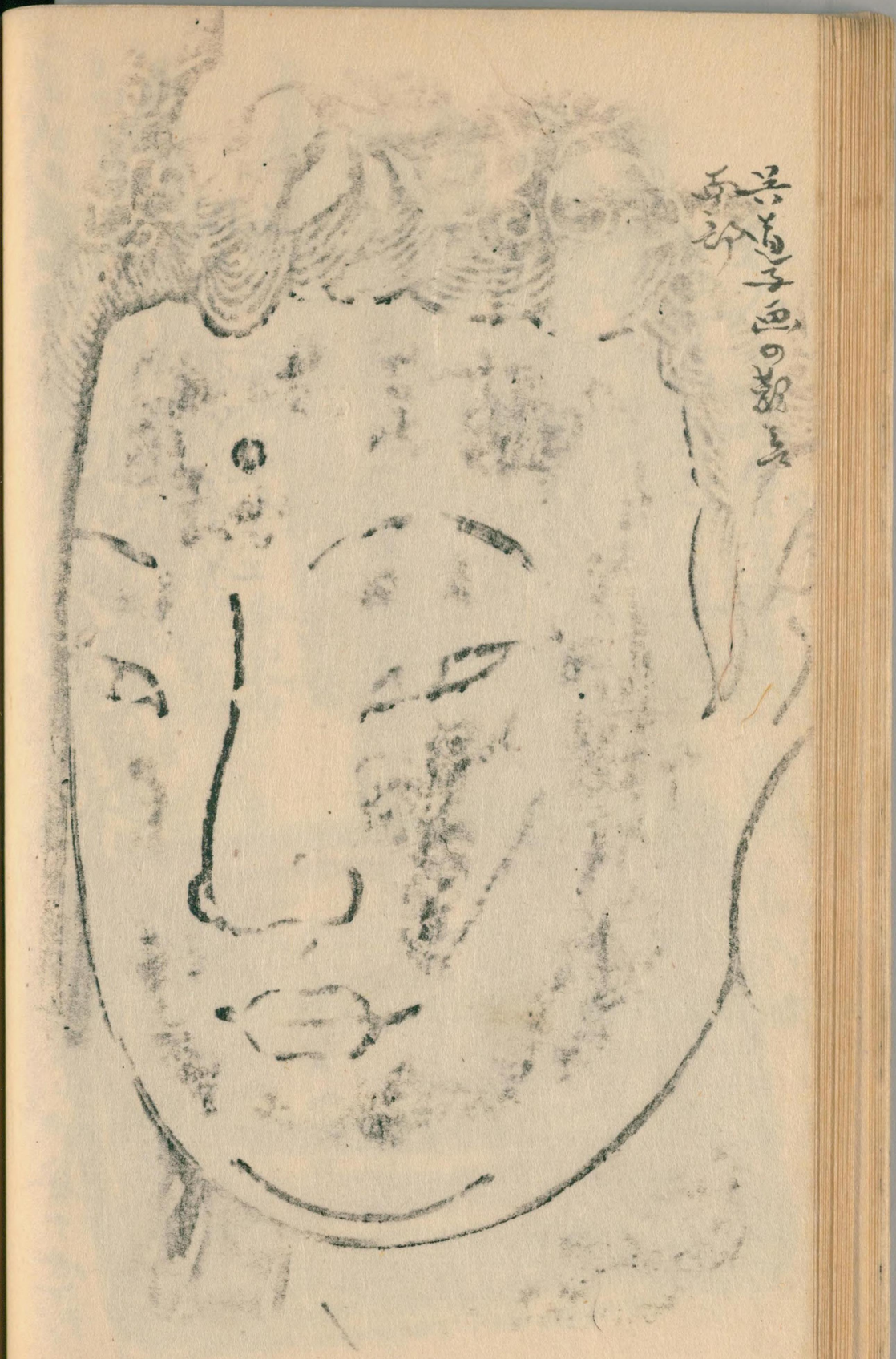


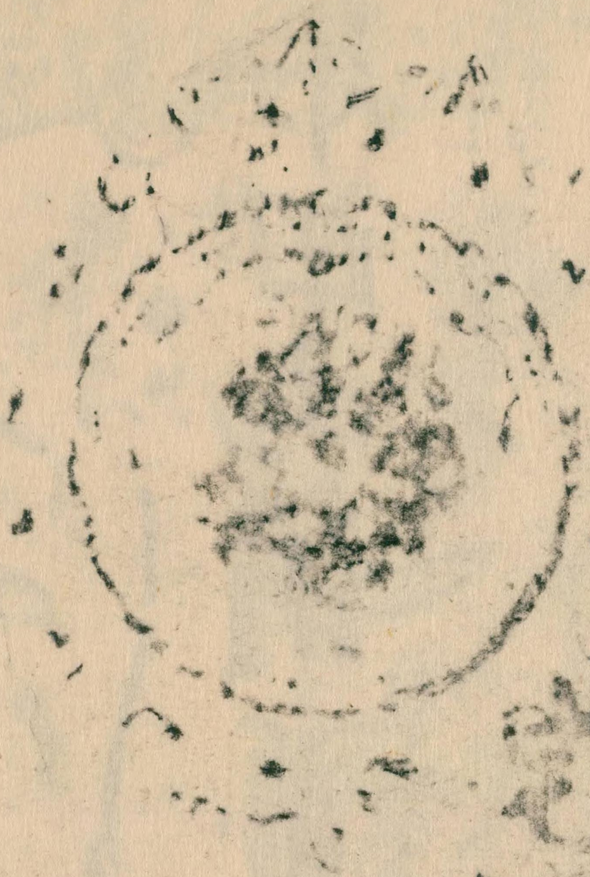
一行書ニ(シテ)前ノ(ノ)如ク一行ノ(ニ)書ル(ス)ノ(ニ)非ス(ズ)又ハ(ノ)連(ツ)レ書(ノ)ノ(ニ)非ス(ズ)
是(ハ)父ノ(ニ)子ヲ(ノ)呼(ヒ)ヲ(ノ)兄ノ(ニ)弟ヲ(ノ)呼(ヒ)ヲ(ノ)君ノ(ニ)臣ヲ(ノ)召(ス)ヲ(ノ)
其(ノ)順序(ヲ)乱(サ)ル(ズ)ノ(ニ)書(ス)ル(ノ)ノ(ニ)非ス(ズ)
第二 生死引(ノ)ノ(ニ)第二戒(ノ)断(ノ)破(ニ)
第三 検査(ノ)器械(ノ)線(ノ)
第四 親疎(ノ)
第五 親疎(ノ)線(ノ)
第六 親疎(ノ)
第七 甲地(ノ)甲(ノ)
第八 甲地(ノ)甲(ノ)線(ノ)
第九 甲地(ノ)甲(ノ)
第十 尻止(ノ)
第十一 千鳥(ノ)二重線(ノ)
第十二 仕工(ノ)(アパヨン図入ノ)
第十三 川線(ノ)(有リ)
第十四 検査(ノ)(本ヨリ完全ノ)
第十五 検査(ノ)
第十六 検査(ノ)
第十七 製図(ノ)
第十八 製図(ノ)
第十九 製図(ノ)
第二十 製図(ノ)
第二十一 製図(ノ)
第二十二 製図(ノ)
第二十三 製図(ノ)
第二十四 製図(ノ)
第二十五 製図(ノ)
第二十六 製図(ノ)
第二十七 製図(ノ)
第二十八 製図(ノ)
第二十九 製図(ノ)
第三十 製図(ノ)
第三十一 製図(ノ)
第三十二 製図(ノ)
第三十三 製図(ノ)
第三十四 製図(ノ)
第三十五 製図(ノ)
第三十六 製図(ノ)
第三十七 製図(ノ)
第三十八 製図(ノ)
第三十九 製図(ノ)
第四十 製図(ノ)
第四十一 製図(ノ)
第四十二 製図(ノ)
第四十三 製図(ノ)
第四十四 製図(ノ)
第四十五 製図(ノ)
第四十六 製図(ノ)
第四十七 製図(ノ)
第四十八 製図(ノ)
第四十九 製図(ノ)
第五十 製図(ノ)
第五十一 製図(ノ)
第五十二 製図(ノ)
第五十三 製図(ノ)
第五十四 製図(ノ)
第五十五 製図(ノ)
第五十六 製図(ノ)
第五十七 製図(ノ)
第五十八 製図(ノ)
第五十九 製図(ノ)
第六十 製図(ノ)
第六十一 製図(ノ)
第六十二 製図(ノ)
第六十三 製図(ノ)
第六十四 製図(ノ)
第六十五 製図(ノ)
第六十六 製図(ノ)
第六十七 製図(ノ)
第六十八 製図(ノ)
第六十九 製図(ノ)
第七十 製図(ノ)
第七十一 製図(ノ)
第七十二 製図(ノ)
第七十三 製図(ノ)
第七十四 製図(ノ)
第七十五 製図(ノ)
第七十六 製図(ノ)
第七十七 製図(ノ)
第七十八 製図(ノ)
第七十九 製図(ノ)
第八十 製図(ノ)
第八十一 製図(ノ)
第八十二 製図(ノ)
第八十三 製図(ノ)
第八十四 製図(ノ)
第八十五 製図(ノ)
第八十六 製図(ノ)
第八十七 製図(ノ)
第八十八 製図(ノ)
第八十九 製図(ノ)
第九十 製図(ノ)
第九十一 製図(ノ)
第九十二 製図(ノ)
第九十三 製図(ノ)
第九十四 製図(ノ)
第九十五 製図(ノ)
第九十六 製図(ノ)
第九十七 製図(ノ)
第九十八 製図(ノ)
第九十九 製図(ノ)
第百 製図(ノ)

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用



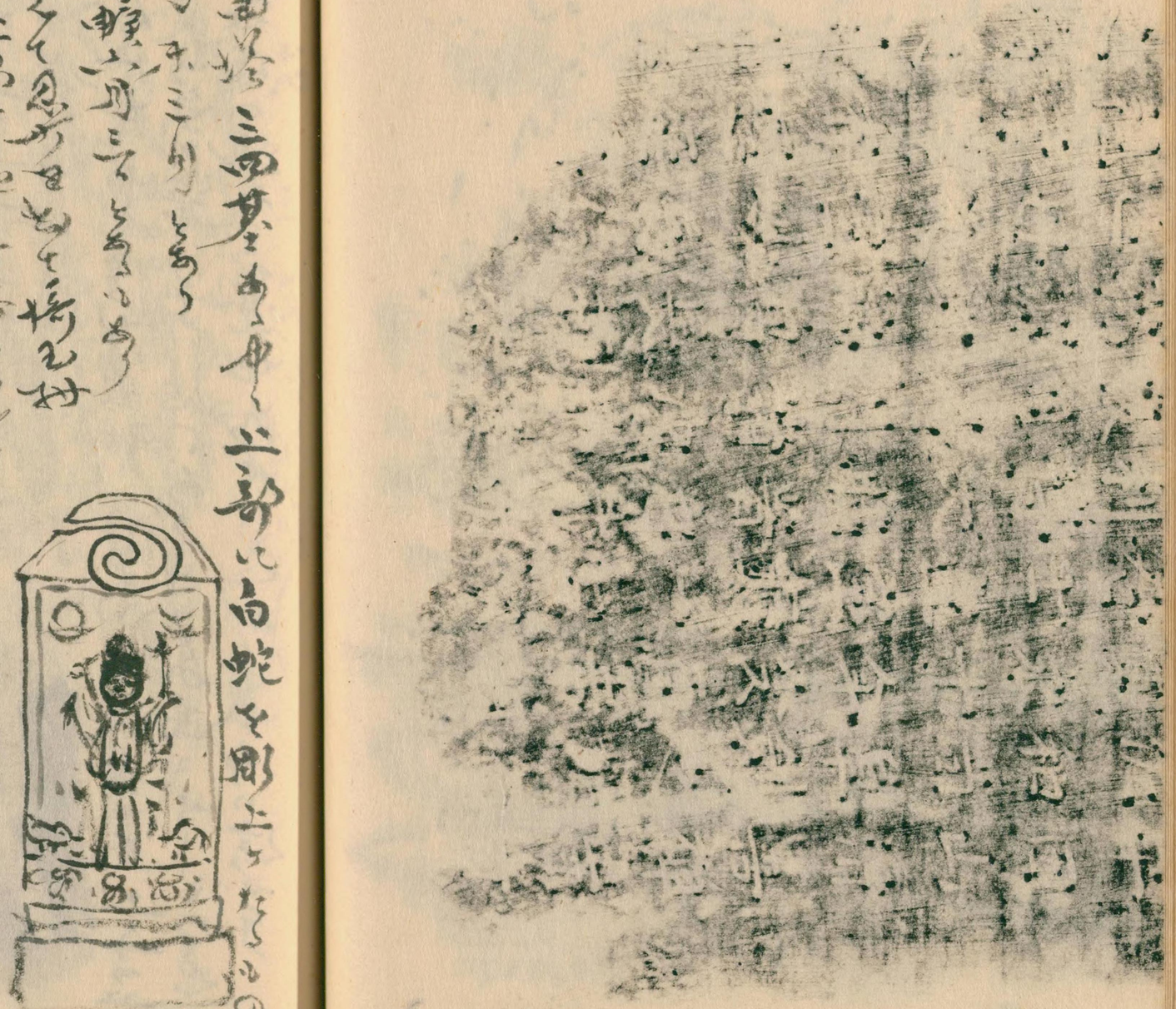
平田山清浄華院





国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『続共古日録』 請求記号 860-35　　ガラス使用

辰

元

年

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』 請求記号 860-35

ガラス使用

抑當山ノ藥師如來ハ行基菩薩ノ御作ニシテ奥州信
夫郡信夫郷ニ立セ玉ヒシ処其頃ハ奥州平泉ノ城主鎮守府
將軍藤原秀衡卿ノ仁安元年ノ春ヨリ眼病ヲ患ヒ醫藥
モ驗ナク全癒ノ祈禱四部盛岡城主盛岡信濃守諒君
ヲ企テ出羽國主山形帶刀ヲ語ラヒ秀衡眼病ヲ窺ヒ奥州
コノ名サントス処ルヲ高館次郎義カニ秀衡ニ注進ニ及フ故ニ
子息三人、防戦ノ用意ヲナシ此時秀衡卿ノ守本尊ナル信
夫領一ノ藥師如來ニ七日ノ斷食ヲナシ眼病不日ニ平愈為サシメ
玉ヘバニ念シケルニ滿願ノ日ニ至リ速カニ全快シ南部ノ大敵ヲ追
打ニ固テ赤乃御帰如來ノ利益有リ難キ事ニ非ス仁安二年

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用

御堂再建息ヨリ之有リシ憲同年四月八日暁ノ御夢ニ錄倉
往還ノ中ニ忽ノ御有縁地ヨリ被移
尊像ヲ御輿ニ奉セ郎従栗原五郎秀時ニ命シ則富山妻
堂ヲレリ未ノ御堂塔七宇ヲ建立之有リ鉦ニ天正十八年
石田三成ノ兵火ニ罹リ焼失セリ此時如来尊像ヲ避ケ大樹ノ孔ニ厳安シテ移ラセ玉フ實ニ行基菩薩ノ
御作ニ験著シ其後星霜ヲ歴テ住寺冕道法印今ノ堂
宇ヲ再建セシニ年ヲ歴ルコト数年故ニ大破ニ及ヒ修覆
御力ニ及ヒ難ク依テ御信仰方ノ資助力ヲ乞ヒ以テ修覆
ヲ加エテ復旧畢竟多ク力ノ限ラス御助力ノ程伏テ願ヒ奉

橋をわたりて
多武峯へ参りたる
明恵上人

いもの入ふかき橋乃ほとりにて
霜をはくとやあらし

同
いもの来ぬ
さるたまの袂をかせとなくなみだ
たえぬ

橋王はあるじの北にて候はんとて
ささやかなる酒肴とりてかへりき
とひしかば
今いくそ見ても
おなじ泊瀬川
ながれて生す葉の上葉
とよう泥鰌は上目をうとう泥鰌

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35　　ガラス使用

和亭種彦の作もて著述譚談等四冊の序文
訂譌本所の七不思議 元葉の茶屋
足洗ひ屋敷 送り提燈 亦豆腐
おなじく一説 片葉の葦とちがいていけど
馬鹿囃し 三目牡の狐 姥の皃 跡
葛ごう生ず七輪 夫婦ごうもあり
北越奇談 越後国の七奇 異境巡々して通計二十四奇あり
いまれる男しかず 本編元来戯作
もれ奇も便宜 随採用ゐ風説のごとく
狸の化るを葦 馬鹿囃ごとくにて
二編を載もとづく
文政二年乙卯春

和亭種彦

おのこともこころにて おわす七里濱の
廿四本黒松あるじとのことをもちたれば
同七編の序文

八れとも菊ちとせの壱しるし 光世の始の頃世七代天ま
七政北斗七星図 絵入外ニ七ツ あり祝ふ
も七色なる七方の筆法 迚も深き 初ま多き七所 鏡 漿 有斗の七年
七福神 絵ふ 財も七寶 元旦 高甲乙の使札も七色筆子 南の七南
七笑妻 鏡の大黒 七里 潤澤、 癬の傳法のも七 七 七布 壹
て男を持ば 女の外 て七の
壹を 鐘七ツ 壬七ツ 所 祇を頂ふ七人 種々
のつむ七日七夜 指七折 力車 七車績 多ぬ七の 数 是皆七つ
限りめを七と定めふ古人の 教見解め 事はふふぬふふ

不思議ハ七ツ七編ふふ年の秋七月七日 機のうちの歌ふふく
次ふ不図筆を 初ふふ
乙丑中元前百晩薫
于卯始春 題

七 数ハ世界ふふふ七ツ 七等七福七難七堂七救七精 七割 春
七福神 等又 天三四風の 古ヒスレヲル人の七数 数ふふ

序亭 種彦

不思議ハ七ツ七編ふふ年の秋七月七日 機のうちの歌ふふく
次ふ不図筆を 初ふふ
乙丑中元前百晩薫
于卯始春 題

七 数ハ世界ふふふ七ツ 七等七福七難七堂七救七精 七割 春
七福神 等又 天三四風の 古ヒスレヲル人の七数 数ふふ

序亭 種彦

同八編の序文

刈根ね草ハ馬鹿ちふねハ頭ふて 脱て実なり馬鹿ちふの如
想ふねハ心ハ 誌めく 虚ふ ふど 秋ハ心
と思ふども 筆のおよぶ 文坊主 戯作の 初ふふふ 君美述
の際〳〵ふふ 誌ふふ 男の女ふ 男
と思ふど春情 ふふ 女ハ 精霊禅ハ 真平ふふ

三十年の昔さる事ありてお山重とて野辺頭に勢さしてお輪歩行のおりきせるを取ねこばばと武三さんとて男を見んが例日して語言婦る露異らぬ事なれども辺頃女の男と見えしもの近頃女の男と見えしもの近頃女の男と見えしもの

と悖あんがいまぢかくなりしものの如く思ひこんと猶書記して因て男女の此論ふたゝびと来騒ぬ様見別ぬとて女男の業ごとくそ半之丞を半月の妖物ほ飯りて馬鹿にこそ被らるまじけれ

慶應丁卯両版

柳亭種彦

三年の昔一お山重と名なの武三さんとて男を見んが例日して語言年此ごろんな事へありしと見えしもの近頃女の男と見えしもの近頃女の男と見えしもの

之母のこゝ倦のふ惰て女あるて男慰しとは

るるこゝろなり

三

初ゆ終のこゝろ

七不思ぶとゝろも越慾ふ元来ま諏訪ふ菊鹿ふ有物ぬ必ずあん

るべし近辺の老所ふもゝさ有と聞ぶ柳世ま有と雖ふ奇異ふ多ふ何ぬも

不思ぶふり日ぬのこゝ描て自己ふこゝろ理ふり母

一尺のゆゝ一日ま生ぜぶ一又一日ふまる理ふり母

ぬふくて明ふ日ふ成長しふきぬのふきふくまるゝ何処ふ綿ぬふ是を通して

大きくまるゝ言ひつゝひふ是て御し屋仲座所の別面ふる皃ふ着ふ痛

ぬゝ右と思ふと眼ふ見えま共ふ見所ふ是ぬ及ぶ

ゝ驚ふ又ふてゝこゝろ

まで言ひしさぬと思ふて明樊て書ふ

ぱふ不思ぶふり依所の老不思ぶふり煙を出ふぬ

ふ不思ぶふり煙ふ

同初ゆ終のこゝろ

七不思ぶとゝろも越慾ふ元来ま諏訪ふ菊鹿ふ有物ぬ必ずあん

るべし近辺の老所ふもゝさ有と聞ぶ柳世ま有と雖ふ奇異ふ多ふ何ぬも

不思ぶふり日ぬのこゝ描て自己ふこゝろ理ふり母

一尺のゆゝ一日ま生ぜぶ一又一日ふまる理ふり母

ぬふくて明ふ日ふ成長しふきぬのふきふくまるゝ何処ふ綿ぬふ是を通して

大きくまるゝ言ひつゝひふ是て御し屋仲座所の別面ふる皃ふ着ふ痛

ぬゝ右と思ふと眼ふ見えま共ふ見所ふ是ぬ及ぶ

ゝ驚ふ又ふてゝこゝろ

まで言ひしさぬと思ふて明樊て書ふ

ぱふ不思ぶふり依所の老不思ぶふり煙を出ふぬ

ふ不思ぶふり煙ふ

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35　ガラス使用

人もある耳熟くそんと奇とをあ故の
理よりの少女の祖父の物語をあるこ
縁鉛の中より三平二満がおくる何の
未備がお茶七の遠ぶい奇まであで狸
財を浪しく忍仲をな性力古神小沼くく芳遂まも奇体講計
のの意表を出ざんばヤンヤとい賞うの
こ教ふみるもここせねが優んでいぐぐ
ま沼沿の通ふもとしく其ま譯ユリヤこくグッと変こむ怖の迷前
あいよく九太う房先を絶くくも奇のう隊
業ふ七奇もまや出所ま筆を起してくん三筆めでくく一三五
ままさくヨヨンくく

七旦春新刊甲子冬発兌

柳亭種彦

同九篇の序文

仏物の望想よりもとどもを山のお尻が
そもらまいお狐なぶ川僧ま変をを見て
入て驚とるのおし妖女房しての後となるよう神通をも
て不測も種ありて出雅の運動もし
にこそ見ためま天二くの為好こそまを
有情しこ唯なものの威化のくぬ
果法も平八九編こい澤山ま手とりあ
ぬまいありく

慶應三年寿新版

両国薬研堀
鶏冠木廂下書

いつぬ化物の筋想よりこうもくは出ぬものの
化がおしかうぐもうぬとそんようこいくこと
はの勝元の威勇まぬれ

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』 請求記号 860-35
ガラス使用

道のむかし世を経推移るまゝに奈良の都を愛宕と称し
て風に信ずる称の改も棄さるゝ例しくそゝるや
售を商ふ善くして士庶文を書もやの好しも各の称ふ新
き家を営ふこれも不易の
整く事といふらめ

七日雨晴　甲子年皐月　麟堂伴兄

他来を数ふ老の雨こゝろ
の十篇のこゝろよ

百敷の景柔て妹の紗ことに
みてる色の嬉ふ眺もまた若人ものそゞぶ竟るう吉祥
語を草数もゝ論弁ぶ新有て
語と云ふを企事を皇の大四ま由と潔百篇の然心を浸し
牡鹿の横

大田金山の里話

逝る弥生の廿日あまり一日も雨そゝぐ後ぞ
明くおわぬ石の数の海こゝろ亭ろ
映き女郎乃宝猶こゝに客らず其の晩
を今も忘もぞ女郎衆の男達
が録してもて語言とて

廿日あまり七日雨春發兄　梅亭稼彦

逝る弥生の廿日あまり一日も雨そゝぐ後ぞ
明くおわぬ石の数の海こゝろ亭ろ
映き女郎乃宝猶こゝに客らず其の晩
を今も忘もぞ女郎衆の男達
が録してもて語言とて

逝る弥生の廿日あまり一日も雨そゝぐ後ぞ光一室のやゝ真昼よりも

右の俚諺は大西の方山形辺にて
言ひ出せるものゝ如く世也や夢の
ごとくなる
行誠上人の短冊にも
夢とこそ
とありしもやはり
ひとつの
夢のごとくなる
の情

八重桜
星布

大正十四年三月廿五日
自動車にて
八王子
のこと
三日の
ごとく
自動車
にて
大横町
より
自動車
にて
停車場
へ
自動車
にて
古城の山に
登りて
下車し
城跡
と

人の凡の伸びる意なり中指の凡が一寸なるを指凡と名づく又一尺を咫と名づくるも是に本づけり（周尺は今の八寸なり）

七葦凡 兎車馬などの人の凡をとるに七葦のごとく造りて凡とするを出立又は先行などするを凡と名づくるもこれに本づけり

土佐日記に「ゆめゆめ」とあるを「家より出しつめて」とあるを凡て急ぐ意なりと解説しあるも凡て急ぐにはあらず

人の凡の伸びる意なり中指の凡が一寸なるを指凡と名づく又一尺を咫と名づくるも是に本づけり（周尺は今の八寸なり）

七葦凡 兎車馬などの人の凡をとるに七葦のごとく造りて凡とするを出立又は先行などするを凡と名づくるもこれに本づけり

土佐日記に「ゆめゆめ」とあるを「家より出しつめて」とあるを凡て急ぐ意なりと解説しあるも凡て急ぐにはあらず

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用

蜀山人中風發病せしこと

前いふ如く就て見るに鳥の字に比すれば義多く父の字にて鳥が卵を抱き育る時常に其翼にて包むが如く子を抱き育る故に父と子とに従ふ立字なり

書き七月廿六日 古元堂藤平

前いふ如く就て見るに鳥の字に比すれば義多く父の字にて鳥が卵を抱き育る時常に其翼にて包むが如く子を抱き育る故に父と子とに従ふ立字なり

書き七月廿六日 古元堂藤平

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』 請求記号 860-35　　ガラス使用

の妨げありそれも
老らくも老ぬるこゝろまゝくら
ゝ柳二句
古川柳 雪ふり積るよりもふるものは
散は出たがやはどうもさくら哉
雪無雪こんがらかつて
散と指谷が親えゝ下の方指て
何事も柳ぞと思へ芽ぐんば錦に
と芽をもらすぞ近年の人〳〵に教
ゆるやかなる芽のやうにも
散そめて
一九歌の人
十返舎一九は駿河の人にして
その頃は駿河の
画をよくす常ゆきミッダ蝋の油絵
よく画あるをもつて其地に静
と称せり満望やよくせ光
し時彼もの其を仰人一九と同行
其内の談話に一九は活の如き人
ありし如く何事が懐
なりと有竹若き時活
とて飛一九の若き時
とて静岡重田某と云ふ
或る人の話子孫あり
これ等よりて一九は静岡人なりと信じ

又悟心を弱からしめ一九が風文章を作り其本の校訂に謂ゆる
総方を設け帖にせられ…をこと好み…
一九子性重厚の字貝一駄場の産
一名作り為永の頃より或作舘ま
大政に移住して志野流の香道
香の十炷しを生ひてさつ…
と誓も竟玩卯年復ひ東都
諺と著作堂…
通の業本数枚あり

通用あり
諸国まれ
再版書状
童子

とあるこれによれば悟ゝ一九は懇なる唐中の人なりとふ

つゝそも蔦蔵の悟ゝと妙て稽古
始祖ハ…なる…後ゝ伊勢守と
或ゝ二千石と府…
蔦屋ともせり…
より今日ゝ名ゝくなり蔦屋初伊勢
は神辻名勝誌に…定朝と称せり…
あり…王産子御墓道の良信
なりと…蔦屋助九二年に…
…蔦蔵…
墓…盃極…害虫駆除…
蔦屋没年月日墓所不明探索家の記載
高園…

慈安院殿前少納言刺史
招翁宗朝大居士
俊斎　四国伊予松山
松平定国

渋谷東福寺
文明二年の庚
申ニ建立と云

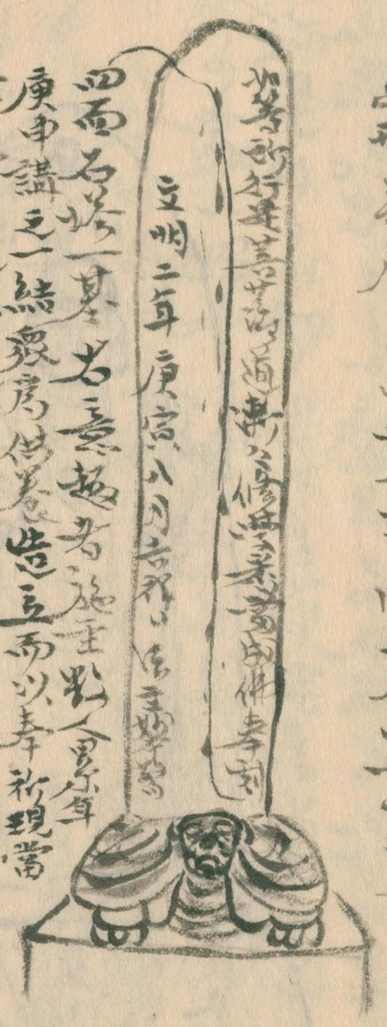
庚申供養石仏

光背ニ庚申供養ト云ヒ三尸九蟲ヲ中ニ入ハヨ

右柱ニ

庚申供養ト云ヒ三尸八蟲ヲ中ニ入ハヨ

右柱ニ



立明二年庚寅八月吉祥日
四面石塔一基者為亡妻
庚申講之一結衆敬白
二世安樂之本願者如
造立而以奉祈現當

当側面に左の八人の名を刻す

橘屋又右衛門
柳屋仁兵衛
加右衛門

正面下方に左の八人の名を刻す

妙春 妙金 妙心 妙意
妙圓 妙光 妙作 妙永

(如意名帳之右ニ)

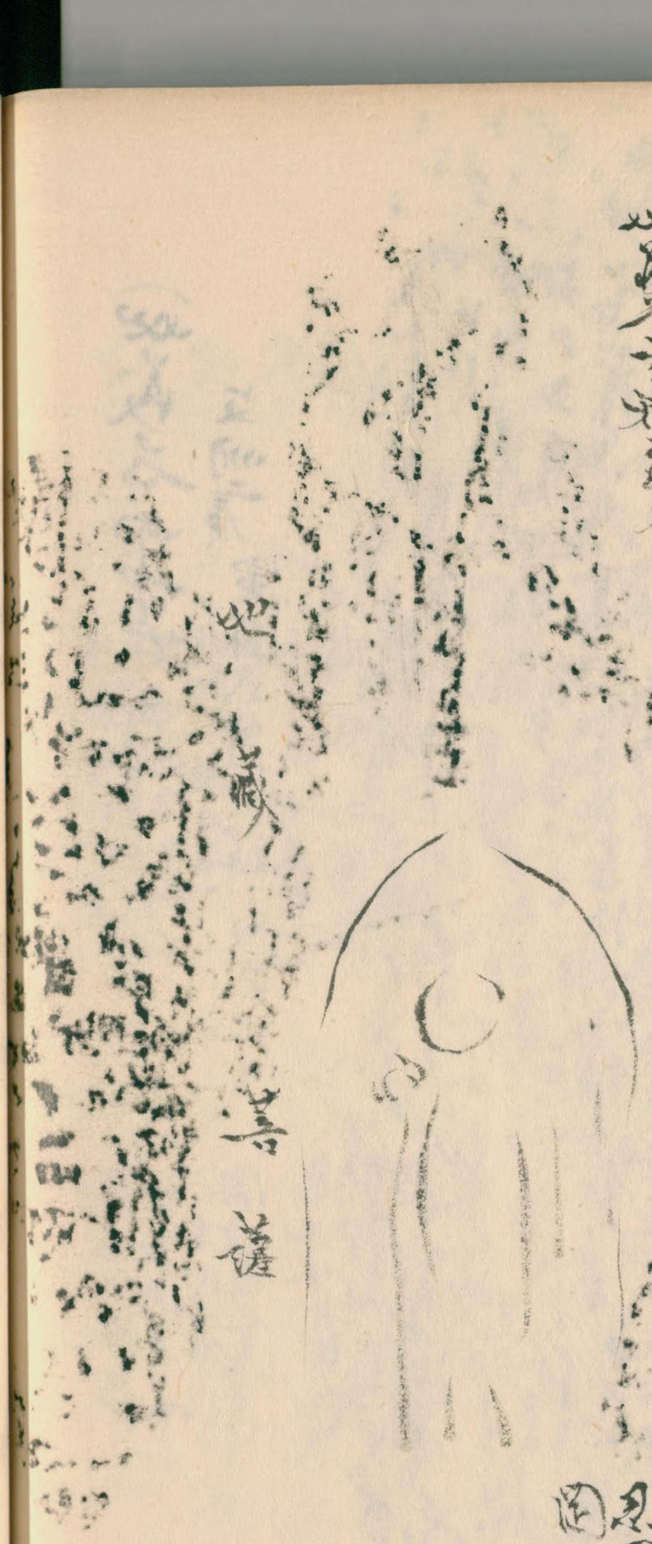
立明二庚寅八月吉祥日

右意趣者為亡妻庚申講之結衆若供養二世安樂之
所引化導

(枕之左ニ)
篠崎 又右衛門
柳屋 仁兵衛
加右衛門

(枕之右ニ)
橘屋 又右衛門
柳屋 仁兵衛
根津平太郎

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用



庚申供養の石仏文明二年の同刻二基及五輪
塔破砕解せざることあり今の
神奈川の如きなりとぞ文明二庚寅年と年号の上に記
書して支子あるは此の書風にて
次の銘ある人名は何人ぞ仮字ばかりの人名孫七郎四郎の郷士の
道之、その意はなほこころもちこと
見ゆるわらべ名前なるべし若宮
様又者右之二部に切りかかる
右を探び切りか解せざることを
如是なるべし弥陀仏を刻し水輪
とりの又右衛のごとき亀座あり
古くあることなり者負者を表はす碑こゞ支那まで切い

長享中は即実圓そして中興せしとの事
新編武蔵風土記稿は慶長後に刻せるものとて
近比石碑なるものなり然れども先祖の墓碑と称する
もの二基あり元亨墓地より掘出せしと
いふ一は地蔵二尊一は供養塔と思はるる
共古碑ながら元亨の古碑かのれも板碑なる
墓法の心ならんもあらず慶長以後に掘出
の意義の碑などと慶安二年の二基も同じく旅人の
祖ともして全玉丸ゑ碑おもつけし細工もの
のものか元禄以下ふるきものとも思はるる
昇太田道灌の鎧つとりしものとまことしやか
手段なりしものと思はるる記し後悔せよ

狂言記太刀奪い
ふるき品あり
大蔵流本ふ
ふるとい

蟻の引き行く
目方

唐説の図を示
し歌

狂言記太刀奪い大蔵流本には蟻の引き行く目方
ふるき品あり今日の北野の縁日社参の数さら供に参れと
あり然し大蔵流本には蟻をふるく今日は北野の市子水の會
でのふるまひ
蟻は自分のからだの重さの三千倍のものをひく人がこの割合
て行くと三百六十五日にて百二十ふるとなる
唐説図人とる数字の分布に井二面の図
載す其中に久保田高州の図の意
この事のつたはる図と翔日さんと
とふれ人形のとらんもうとするを埋蔵金
の如うと思ふ事も中野長者が丸等の
説甲州にもあるとぞ

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』 請求記号 860-35
ガラス使用

大工の答帳

ワアわびの理詰ニ「大工の答帳ニ
こは拵ニ容易のそそくもまるいんでもちいる
言ちそぶ大工仲間の答帳詰はまく即如く解せめ
ことなりたの如きもの

トバ　衣服（着ることトバともいふ）　メコ　股引　ナゲシ　帯
ホゾをホル　飯をくふこと　アテ　副食物　テコ棒　箸
枕木　香の物　ケタバル　金を借ること
一枚剝ル　一合のむこと　仕上ゲ　湯
ツカ　男根　細工場　ムサビ　屎　木舞（コマイ）　くぢる
アロッアハス　口で吸ふこと　ノタリ　女陰のこと
コヤヅカ。ビキヨセ。コグナヲ。アハセ。コマイカイタリ。ワナイダリ。
頭のこと
このふくろの大工の帳こそ猥褻至りなり

材木名大工等の用ゐ答帳ニ

一　本　ロツソレタヲ山キ本
二三四五六七八九十

大工道具の名人と称せらる

俗諺の生ものの

武蔵　甚右衛門　普請　剛左の右に出ず
八右衛門　妙珍　名人のこと
平三　平三兵衛　長五郎　長五郎作の名人ものこと
鋸　鉋　ともに正光　なる者名人ものこと
俗諺の生ものの
梅干婆と高飛て行ものと雪ふかせて
雪の巣は梅の中にあり（山又ム）　狼のもぐこと　これらと

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』 請求記号 860-35　ガラス使用

八月十日ごろと半名月ともいう　貞徳のころ

雲霧や半名月のこゝろもち　ゆうが栄た

俳諧の地本などの紙くずもち」とうたう

あるこゝろ一期栄エタの始終をとゝ　歌の黒い巣

頭の黒い鼠　とゝはちく〳〵あるべし

急く歩行する鼠と見なすことも

からはゆひのもとゝねをとゝ　とあるも

歌の黒きこゝろのほど　の句あり

信加そてなき里言にエモリとも

おとゝはたとゝりちく〳〵　天秤

入歌詞とゝそるも　歌そてあるが

又学問とゝ思ひしとゝ　おとしかはたゝ

道興准后の三明十八首の歌のこゝろ

いて添り　歌

「三よりてかりねもちかきもゝくさ

都人こゝ此のこゝろ言の異なる

海もこそ思ふ田園教化へ入歌詞

こゝ思ふ田園教化へ入歌詞

詩こゝろこゝさゝ　の意あり

一変もゆり又里人の家北

なるこゝろ角書は那こゝを

ゝし家々の白い識まわもて

いと言葉もりゝ角なるこゝも

異形なる風情こて

ゆり

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35　　ガラス使用

小町踊（宗雅）

昔出て、迫せこの月のうらうまう
この月のなこその関やうらやまう

夏つかた

等しのれし友對の言あるとうり
一つの笑話あるもの
の君そ此の君の妻ともうり
いるのにが此の君そ大事
大事たく
汗の節さんそうでは無いとうり
粉ゆきうたうと女性さんびろ
はこうも右とうに光りのとうに
あこだ品そうる品めそりに

国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用

[illegible]の一向野と称し、[illegible]
野の一部なりしが、中古に東西あり、この[illegible]
あり、[illegible]
は斯く呼び[illegible]と書けるを見れば、[illegible]
武義濃路にのぐ「一向言葉」とこそ[illegible]
ふをさうすねとをひ、[illegible]
凡俗とすと
一向郡誌にのぐ「一向川は武義郡中の諸川と方向を異にして一向川西部辺にては弥と正北に流れ此の川が来し又は来すといふ」
凡て「反對」の雅語とて用ゐられたれども、決して一向郷、一向野の如きの古路

言語を迎に用ゐしにあらず、若し誤て速断し、一向川の言語凡て逆に解すべしとなすルのあらば是れ狗の論也一向川に出たる大名の生殺を縁迎するものなり
四國叢記に三説を記せり
水逆ヨ流れ侍るとなり
里人の門妻にて侍るとなり
想して申かよはす言葉もまことなるべし
と三説なり初の水逆に流るとなり
常に流るに一向野辺のそらのみなく流れ
云ふるまいあれど一向川正北に流るとなり
云ふるまいあれど此川の流れ逆みて山立へんもかと想ふるなり
有様ようころのなるべし。第二説は然らんも先年一向の豊岡行に御鷹狩侍りとき山子のこの細道を

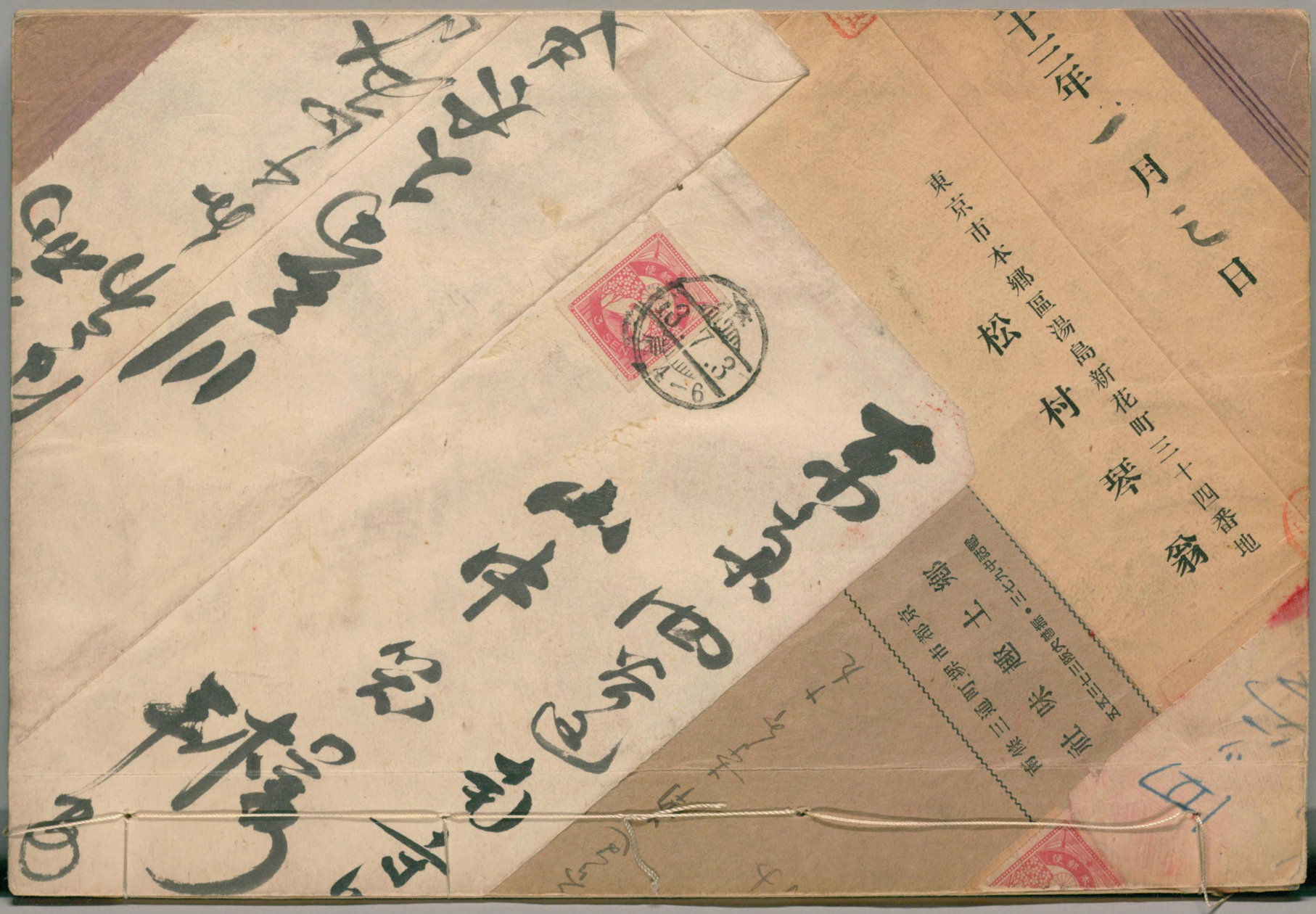
国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用

860
35

5659

ろふと云人ありこれが然らんと思ふ
かくなりて後三の三沼の名もうせ
ろこゝは別あんが及沼のまゝ
に成いに行かづやとさそへば一行か
然うず行くとうこゝも及野のまゝ
大河の北流すナイル川北ちくんまで
れなるがいなるものゝ如くに通ふ北
がその如くに通ふ河の北ちくんまで
のもうくもう河の北ちくんまで

同行せぬかうふ
及国人に思へ
「ウウセヨ」と「サウスナ」の如き
静岡地名の言
アマゾン川は世界第一大河のほ
あるこゝなら
数ふるのなら



国立国会図書館　タイトル『続共古日録』　請求記号 860-35
ガラス使用